

〈研究ノート〉

中島飛行機三鷹研究所における動員学徒

高柳昌久

1. 本稿の目的

本稿は、筆者が2002年から行ってきた中島飛行機三鷹研究所についての調査¹⁾から、学校での勉学にかえてこの研究所での労働を強いられた学徒の体験を抜き出したものである²⁾。最年少で12歳の学徒をも労働力として動員した「総力戦」の一面を示したい。その際、聞き取り調査という情報源の特質を活かし、なるべく幅広く彼らの生活を捉えることにより、より実情に接近したい。

2. 三鷹研究所について

三鷹研究所は、中島飛行機の創設者中島知久平が、当時各地に分散していた中島飛行機の開発部門を統合しようとして構想したものである。敷地面積は合計約60万坪に及んだ。1941年12月に地鎮祭が行われた。しかし資材不足から建設は遅れ、主要な建物が出来たのは1944年の春ごろであった。そして実際にここに移転した中島飛行機の組織は、群馬県の太田製作所にあった陸軍機体開発部門の一部と、東京都の荻窪製作所にあった陸軍・海軍の発動機開発部門の一部だった。

主な施設としては、陸軍の機体部門の設計・研究・治具（部品を作るための器具）製作などが置かれた研究本館（設計本館とも呼ばれた。現、ICUの大学本館）、陸軍の試作機の部品製造・組立てをおこなった格納庫、発動機部門の発動機試作工場（現、富士重工業東京事業所内の工場）などがあった。

陸軍機体開発部門は、B29迎撃を目指した高々度戦闘機キ87を開発し、初号機を完成させ試験飛行を調布飛行場で行った。ただこの飛行機は資材不足から量産は不可能であった。その後この開発部門が取組んだのはキ115「剣」の設計・試作である。最小限の資材と労働力で生産できるもので、陸軍はこの飛行機に爆弾を固着しそのまま米艦船に突入させるつもりであった。三鷹研究所では初号機を生産し、その後各地の工場で計105機が生産されたが、実戦に使用されることはなかった。

発動機開発部門は最初、アメリカ本土を爆撃するための巨大爆撃機Z機「富嶽」の発動機・ハ54の開発を行った。しかし1944年夏、サイパン島が陥落したことによりこの開発は中止となった。その後はキ87のための発動機であるハ44や、小型で高出力の発動機としてすでに実戦使用されていたハ45「誉」の改良型の開発などをおこなった。

1945年4月に中島飛行機は国営化され、第一軍需工場となった。三鷹研究所の機体部門は第21製造廠となり、発動機部門は第22製造廠となった。それとほぼ同時に軍需省から疎開命令が下り、機体部門の主要部は同年8月、岩手県黒沢尻（現、北上市）を中心とした地域に疎開した。発動機部門は五日市と秋田県湯沢に疎開を始めたが作業中に終戦となった³⁾。

3. 学徒動員について

満州事変・日中戦争による労働力不足を補うため、1941年11月勅令「国民勤労報国協力令」により、1年間で30日以内の軍需工場などへの学徒動員が始まった。東京都の場合は、東京都長官・警視庁長官が共同で学校長に対し出動命令を出した。期間はしだいに長くなり、ついに太平洋戦争も後半に入った1944年2月、閣議決定「決戦非常措置要綱」により、1944年度から中学校程度以上の学徒が1年間通して動員されることが定められた。

動員を必要とする会社・事業所は、東京都の場合は警視庁を通して厚生省に要望を提出した。厚生省労働局では日本全体で必要な労働力を把握し、都道府県ごとに動員できる数を決定し、調整して都道府県に通達した。東京都の場合は警視庁勤労部がそれを受けて工場・事業所ごとに動員する数を決定し、東京都の教育局が学校ごとの動員数を決定した。学校側には動員先の選択権は基本的にはなかったのである。

なお1941年8月に文部省が発した訓令「学校報国団体制確立方」により、各学校ごとに学校報国隊が編成された。軍事教練などのための指揮系統を確立するものだったが、学徒動員もこの報国隊の指揮系統によって行なわれた⁴⁾。

4. 三鷹研究所に学徒を動員された学校

動員された順に学校を列挙し、動員開始時の学年⁵⁾、人数、時期⁶⁾、筆者がおこなった調査の対象となった人数と方法、三鷹研究所への動員について記述のある記念誌などについて述べる。

①日本大学第二中学校（戦後、日本大学第二高校に）。5年の中の1クラス約50名⁷⁾。

1944年4月から1945年3月の卒業まで。5名と面接した。

②都立機械工業学校⁸⁾（戦後、都立小金井工業高校に）。4年生（3期生）全員。約160名。

1944年5月から1945年3月の卒業まで。3名と面接し、3名と電話、さらに2名から手紙等を頂いた。『東京都立小金井工業高等学校創立50周年記念誌』（同校、1989年）。町田市企画部『ふたたびくりかえすまい』（町田市、1988年）には元同校学徒の田中彰の体験記が掲載されている。

③航空科学専門学校（戦後、東海大学工学部に）。1944年5月から1945年5月まで。2

年生の物理科80数名の内70数名。2名と面接した。『東海大学工学部三十五周年史』

(同学部、1979年)。

- ④武蔵野女子学院高等女学校(戦後、武蔵野女子学院高校に)。4年紫・紅組73名が1944年6月から。3年全員(人数は不明だが当時1学年は100名程度)が8月20日から。終期は不明だが、通例からすれば、4年は1945年3月の卒業まで、3年は終戦までとなる。『武蔵野女子学院五十年史』(同学院、1974年)。
- ⑤三鷹第一国民学校(戦後、三鷹市立第一小学校に)。高等科2年男子1クラス40数名・女子1クラス40数名らしいがはっきりしない。1944年8月から1945年3月の卒業まで。1名と面接し、1名と電話。『三鷹市立第一小学校創立百周年記念誌』(同校、1992年)。
- ⑥都立玉泉中学校(戦後、都立十中(後の都立西高校)に統合される)。1944年11月から終戦まで。2年全員約150名(ただし終戦時には疎開などで約100名に減っていた)。2名と面接。1995年に同窓会が文集『玉泉』を自費出版。三鷹研究所について14名が書いている。
- ⑦都立桜水女子商業学校(戦後、都立桜水商業高校に)。4年生の一部。人数不明。1944年4月から中島飛行機荻窪製作所へ⁹⁾。1944年に同校のIは、荻窪製作所から同製作所の試作部門が三鷹研究所に移動したのに伴って三鷹研究所に移動したという¹⁰⁾。12月と推定される¹¹⁾。通例に従えば1945年3月の卒業まで動員されたことになるが、Iは卒業後も学徒報国隊として三鷹研究所にいたので、一部の者は専攻科に進学して終戦までここに継続して動員されたようだ。
- ⑧都立航空工業専門学校(戦後、東京都立大工学部に)。1944年12月から終戦まで。1年航空機科・航空発動機科全員約80名。1名と面接。
- ⑨都立工業専門学校(戦後、東京都立大工学部に)。1945年1月から終戦まで。1年機械工学科約50名。1名から手紙。山田誠『最後の特攻機「剣」』(大陸書房、1974年)¹²⁾には同校の1名から山田が聞き取りをした内容が収録されている。福岡県高教組八女支部『私たちの戦争体験の記録・六一平和教育のために』(同支部、1987年)には元同校学徒の佐藤東喜彦の当時の日記を交えた体験記が掲載されている。
- ⑩東京帝国大学文学部(戦後、東京大学文学部に)。1945年1月から終戦まで。1~3年、同一時期に動員されていた人数は約50名。身体検査により動員・徴兵が免除されてきた者で、改めて検査され任に堪えられるとされた者。1名と面接。終戦直後にまとめられた詳細な記録・斉藤健(解題は菱刈隆永)「第一軍需工廠配属 東京帝国大学文学部勤労報国隊報告書」(『東京大学史紀要』第17号、1999年3月)がある。東大十八史会編『学徒出陣の記録』中央公論社1968年には榎本宗次、黒住武・菱刈隆永による2編の体験記が収録されている。『戦争のきずあと・むさしの』第8号(武蔵野の空襲と戦争遺跡を記録する会、2003年10月)には宗左近の体験記・「体験」が掲載されている。三浦朱門『武蔵野ものがたり』(集英社、2000年)には三鷹研究所での体験が見ら

れる。

- ⑪都立重機工業学校（戦後、都立世田谷工業高校に）。5年生全員約140名¹³⁾。1944年4月から東京飛行機（後の倉敷飛行機）、1945年1月から3月の卒業まで三鷹研究所。2名と電話。都立世田谷工業高校『創立60周年記念誌』（同校、2000年）。
- ⑫都立第五高等女学校（戦後、都立富士高校に）。1944年の8月から3年生は立川飛行機砂川工場と北辰電機製作所に動員されていたが、4年生に進級後の1945年4月、空襲により校舎が全焼。焼け跡片付けに駆り出された後、1945年5月に4年生・専攻科が三鷹研究所の発動機部門に入所、終戦時まで動員された。1学年の人数は約200名だが、三鷹研究所に動員された人数は50名ほどではないかという¹⁴⁾。1名と面接、2名と電話。都立富士高校『創立六十周年記念誌』（同校、1980年）。1995年に第24・25期同窓会「さわらび会」有志が文集『さわらびの記憶』を自費出版。三鷹研究所について8名が書いている。元同校学徒の松島千恵子『昭和に生きて』（自費出版、1996年）には三鷹研究所での体験が見られる。

以下は動員開始時期が不明な学校である。

- 三鷹第二国民学校（戦後、三鷹市立第二小学校に）。高等科1年男子50名弱が1944年夏ごろから倉敷飛行機に。その後終戦まで三鷹研究所に。2名と面接。三鷹市『いま語り伝えたいこと』（同市、1986年）には、元同校学徒の伯母豊、中村義一からの2編の聞き書きが収録されている。
- 私立杉並高等女学校（廃校。敷地は、現在都立杉並高校）。2年。人数不明。1944年11月頃から通例に従えば終戦まで¹⁵⁾。
- 東京貿易植民語学校¹⁶⁾（戦後の変遷は不明）。時期、学年、人数不明。最初の中島飛行機荻窪製作所へ。その後三鷹研究所に。1名と電話¹⁷⁾。

この他に、女子美術学校（戦後、女子美術大学に）、横浜工業専門学校（戦後、横浜国立大学工学部に）からも動員されていたという複数の証言がある¹⁸⁾。

以上より1945年2月の時点では1,100名を上回る学徒が動員されていたことになる。なお、三鷹研究所の従業員数は学徒も含め、機体部門約2,000名、発動機部門約2,000名、計約4,000名だったという。つまり三鷹研究所の従業員は4分の1以上学徒だったのである¹⁹⁾。

5. 動員された学徒の体験²⁰⁾

5.1. 動員前

航空科学専門学校

「三鷹研究所に動員と発表された時は、学校は新設で施設もないので、中島飛行機の『東洋一の航空研究所』で最先端の技術に触れられることを期待し、嬉しく思った。」²¹⁾
日大第二中学校

「すでに予科練に行った同級生もあり、自分もお国のためになるのなら嬉しかった。また、未知の世界に対する期待感もあった。」²²⁾

第五高等女学校

『アッツ島の仇は増産で』のスローガンも目に入る。学校で片手間の仕事では、命がけの戦場の勇士に申し訳ないと乙女心があせる。組の分隊長だった私は、気がせくままに手をあげ担任をお願いをした。『こんな重大な戦時下のにんきに勉強などしていいのですか。お国のため 1 日も早く工場へ動員させてください。』いぶかし気に話を聞く K 先生は、『皆さんの気持ちは分かる。が、今しばらく動揺しないように。四年生になれば動員されて工場へ行くのですから。それまでは…』すかさず私は、また立ち上がる。『先生、そんな悠長なことをしていたら間に合いません。戦争に負けたらどうするんです。』先生は慈愛とも軽侮ともつかぬまなざしを向け、何か言いかけて絶句する。教卓の両端をつかむ両手が震え出す。顔が紅潮して見る間に涙があふれる。全く思いもかけず先生がすすり泣きを始めた。信じられない光景に、組中がしーんとなり私は動転する。」²³⁾

武蔵野女子学院高等女学校

「5 月 27 日、学院では生徒の本格動員を前に『勤労報国隊壮行会』を行なった。国民儀礼、訓示のあと、在校生代表が壮行の辞を述べ、勤労報国隊代表が悲壮な決意を宣誓にこめた。『海ゆかば』『学徒報国隊の歌』の大合唱が、送る者送られる者の心を深い感動につつんだ。」²⁴⁾

玉泉中学校

「11 月初旬、勤労働員が決まった。そのとき我々は歓声をあげたものである。それを見てある生物の先生は、『上級生は悲愴な思いで学校を去り工場に行ったのに、君等は喜ぶなんて何たることか!』といて嘆いた。しかし、我々の大方の気持は、戦況が不利になるに従って学業にいま一つ身が入らず、また軍事教官の教練もいささかマンネリで、一刻も早くこの状態から逃れたいという思いと、早くお国の為役に役立ちたいという当時の少年の純粋な思いが混じり合って、あの歓声になったように思う。」²⁵⁾

5.2. 入所式

機械工業学校のある学徒の日記²⁶⁾

「5 月 24 日 晴

今日より学業を廃止して、いよいよ通年動員へ行くことになった。この話は 1 月ぐらい前から有ったが、いよいよ今日から行くのである。会社名は中島飛行機の三鷹研究

所である。何時もの如く登校し、3年生より、いとも美しき文章の壮行の辞をいただき、第四学年万歳との校長の発声で唱えて、勇躍徒歩で工場へ進軍したのである。

午前中は、雑木林の中で、休む。これから先はどうなるのだろう、この会社はどんな研究をしているのだろう、仕事は何をするのだろう、待遇はどうか等の話をして過ごし、午後より幹部食堂へ行って、入所手続きをすませ、4時半頃帰途の道についた。

5月25日 晴

今日は、8時までに工場へ行って入所式をおこなった。発動機試作工場の2階が式場である。発動機試作工場の機械類は、学校のとは違い、ものすごく大きい。が我らは機体の方と言われているから、この機械は使用しないだろうと思うと嬉しくない。

式では総務部長、厚生課長より、様々丁寧なる訓示を受け、校長の激励の言葉に励まされて、下に降りた。そこでは工場長から、未だこの会社は新しいので、設備が整っていない。又、工場へ来て、こんな事をさせられるとは思わなかったと云う様な点がないではないから、その点を予め承知して下さいという話。又、校長からは、赤い血潮のもえたぎる学徒が…と、体をふるわせての演説を聞く。

午後からは学徒としての体面を維持するようにとの訓示があつて、一日は終わった。

5月26日 晴

午前7時半工場の門をくぐる。本館の2階で、各職場の技師が来て、それぞれの説明があり、職場の配当をした。自分は試作工作班を希望した。この班に39人が入った。班に入っていきなり班員名簿を書かせられ、それがすんで、口頭試問を行わせられたのには驚き入った次第である。『君の本籍は』『君は将来何になりたいか』『君は電気、金属、発動機部品製作、運搬のどれを希望するか』『君は発動機部品をやれ』等など約10分間にわたる試問があつた。しかしながら、先ず当分は、金属で仕事をする事になった。

午後は、身長、胸囲、体重、肺活量、視力、血沈等、又、ツベルクリンをやった。それで今日は終わり。』

玉泉中学校

「11月24日に入所式。中島乙未平所長の訓話があつた。創業・草分け時代のこと等が話され、中島知久平のこと、利根川河川敷を飛行場としたこと等を聞いた。」²⁷⁾この入所式が行われたのは研究本館前にあつた広場であつた²⁸⁾。

『『大東亜戦争も今や酣(たけなわ)となり、我等学徒がこの聖戦遂行の一翼を担うため…』鷹研への入所式で読んだ宣誓文の出だしはこんなことだったと思う。入所式が終わった直後に警戒警報が、そして間もなく空襲警報が広い構内に鳴りひびいた。『学生は防空壕に入れ!』という大声で私達は地面にぽっかり開いた入口から壕に入った。防空壕とはいっても地面を素掘りしただけのトンネルで、明かり一つない。先頭に立って入った私は真暗闇の中、足許に気をつけながら泥の壁を手探りしながら奥に進んだ。』²⁹⁾

「初めは本館前の雑木林の中に避難した。今まで見たこともない編隊を組んだ B29 が、高射砲の弾幕や豆粒のような迎撃戦闘機を寄せつけず、東寄りの上空を次々と北上しつつ、キラキラ光る機体から爆弾を投下する瞬間がはっきりと目撃された。」³⁰⁾

玉泉中学校学徒は入所式の日に、B29 による東京に対する初空襲を目撃したのである。三鷹駅の北にあった日本最大の軍用機用発動機工場・中島飛行機武蔵製作所が目標とされ、57 名の死者が出た。この後、B29 は次々と日本列島を空襲し、12 月 3 日の同製作所に対する空襲では学徒も 17 名（または 16 名）死亡した³¹⁾。

「多数の勤労働員学生がその爆撃の犠牲になったことを噂で聞いた。大変ショッキングな出来事であった筈だが、毎日戦争の悲惨なニュースに慣らされてもおり、また厳しい報道管制もあり、当時はさほど大きな出来事として人々の口に上らなかったように思う。」³²⁾

5.3. 各部署での体験

a 発動機部門（発動機試作工場）

機械工業学校

「最初は物を運ぶなどの下働きだけ。そのうち機械をあてがわれた。ボール盤や旋盤である。見て覚えろということで、それを扱う訓練もなかった³³⁾。早稲田を出た部長あたりが、工場内をぐるぐる歩き回って威張っていた。『工業学校にいたんだからできるだろう』と歯車の図面を渡されるが、習ってもいない計算が必要で、とても歯車は作れない。一種のいじめである。これが一番つらかった。それでこっそり持ち出し禁止の図面を持って三鷹研究所を抜け出し、自転車で機械工業学校まで飛んで行って、先生に計算してもらって歯車を作った。その後自分が作っていたのはアルミのピストンの一部だった。」³⁴⁾

三鷹第一国民学校

「自分が配属されたのは『山田組』で、エンジンの部品を規定のサイズに削る仕事をするところだった。当時作業は『組』に分かれており、給与は『組』ごとの出来高制だった。グラインダーで部品の表面を削るのだが、わずかでも削り過ぎるとオシャカ（不良品）になる。組長やその周辺にいる熟練工が、下働きが不良品を作ってしまうと組全体の出来高が落ちるため、オシャカが多い下働きを容赦なく殴っていた³⁵⁾。

最初のうち自分は 100 個の部品の内 80 個ぐらいをオシャカにしてしまった。そうすると、『部品は恐れ多くも天皇陛下のものであり、それをこんなにオシャカにすることは国賊に等しい』と言われた。何も言い返せない。そして手だと痛いというので皮製のスリッパで頬を殴られた。口の内側が切れて、一ヶ月ほどは塩気のあるものがしみて食べられないほどだった。

家では母が塩気のないお粥を作ってくれた。ただ原因が分かると父親からまた怒られ

ると思ひ、殴られたとだけ言って理由は言わなかった。しかしあまりにそれが続くので母に聞かれ打ち明けると、家にある米や餅を熟練工に配ったらどうかと言われた。家は大きな農家だった。それで米や餅を持っていくと、熟練工は大喜びして仕事を簡単なものに変えてくれた。

そのうち空襲が激しくなると武蔵製作所などから熟練工が三鷹研究所に移動してきて、自分たちの機械を使うようになり、自分たちは雑用に回された。こうなると空き時間がずいぶんあり、巡回してくる憲兵³⁶⁾に見つからないように注意しながらバーゴマに興じるようになった。扱いに慣れたグラインダーで削った自分のバーゴマは強かった。³⁷⁾

b 機体部門（格納庫）

日大第二中学校

「ベークライトやジュラルミンの板に原寸大の部品の線を描く原図部門に配属された。班ごとに出勤率を競っており、高熱が出ている航空高専の人をリヤカーでむりやり出勤させたりした。神風の鉢巻が配られた。軍帽の上から鉢巻をしたら、『天皇陛下の星を鉢巻で隠すとはなにごとか』と怒っている軍人がいた。」³⁸⁾

『『第一部品』班に配属された。なんの部品を造っていたのかはわからないが、大勢の人が頑丈な机の上で万力で挟んだ金属を打って部品を作っていた。大工、自転車屋、金粉蒔絵師などの仕事をしていた人達が徴用されて来ていた。毎朝、しっかりやれというような精神的な訓示はあったが、ほとんどの工員が鼻歌を歌っていたりして末端のほうには緊張感はなかった。増産工場ではなく試作工場だったので夜勤はなく、おおむねのんびりしていた。』³⁹⁾

三鷹第二国民学校

「自分は小柄で当時体重は 30kg ぐらいだったと思う。だからキ 87 の胴体の細くなっていく尾の中に耳栓をして入り、外から工員がリベットを打つのを内側から押さえる作業をした。同じ部署にいた専門学校の学徒は年上だったが不器用で、回ってきた監督官に『こんな小さな子供（自分のこと）でも出来ることがどうしてできないんだ』と言われ、棒で殴られていた。そんな時、自分はキ 87 の胴体の中に隠れていた。格納庫は寒いので一斗缶で木を燃やして暖をとっていたが、他の部署の材木を燃料にするため盗み、追いかけられた時もキ 87 の胴体に逃げ込んだ。そうすれば違う部署の工員は機密保持のため、そこには入れないからだ。」⁴⁰⁾

工業専門学校

『『剣』の尾翼の設計を手伝っていた。『剣』について、『これはどんな中古の発動機でも積めるように設計されている。しかも 1 回しか飛ばない。だからエンジンを取り付けるボルトですら 4 本しかない。何本も使ってはお国のためにならないからだ。自分

たちもいずれは行かねばならないのだろうが嫌になる。どうせ死ぬのならば、こんな飛行機に乗るくらいならまだ歩兵のほうが気分がいい。』といった会話が交わされているのを聞いた。そして夜、格納庫の中でこの会話を思い出し、製作中の粗末な『剣』を眺めた。空気取り入れ口の内側にはズックを使い、ガソリンキャップは、出撃後は二度と使わないからリベットで絶対開かないように固定されてしまう。風防は木材でワクを作り銀色のペンキを塗り、ガラス板をはめ込んだものだった。自分は理科系だからということでここにいる。しかし文科系に進み、さらに予科練習生として九州に旅立った仲間は、数ヶ月内にはこの飛行機で出撃するかもしれない。自分はこんな飛行機を作るために理科系に進んだのではないと思い、戦争の非情さをしみじみ感じて涙した。』⁴¹⁾

c 機体部門（研究本館）

航空工業専門学校

「初めはキ 87 の油圧関係の設計の仕事をした。油圧のことはまだ学校でも習っていませんでしたので、家に帰ってから参考書を読んで仕事をした。設計は研究本館 3 階の西側にあり、暖房がなく寒いので、女学生はコートを着たまま製図の仕上げなどをおこなっていた。』⁴²⁾

機械工業学校

「技師が設計した風防のカーブの設計図を、撓み定規で引く滑らかな曲線を使って原寸大に拡大するとき、計算値と少しずれが生じる。その数値の違いを設計者に戻して修正する仕事を担当した。当時はコンピューターなどは無く、筆算、算盤や手回しの機械式計算機（加減乗除のみ）で計算をおこなうので大変だった。上役に何の風防かと尋ねてみたら、体当たり用の特攻機だ。木や布をずいぶん使う。飛び立つと脚を落としてしまう。このことは絶対の秘密だ、と言われた。そんな飛行機を作っているのかなあ、と思った。その後同級生から何をやっているんだと聞かれても答えられず、いじめられそうになった。』⁴³⁾

航空科学専門学校

「研究本館の玄関に入って右側にあった材料試験部で、ジュラルミンの不純物を分光分析器で分析する仕事をしていました。分光分析器は島津製作所の機械で、当時としてはいい機械だと言われていたが漏電した。絶縁のため、下宿にあった長靴を履いたら痺れなくなりました。機械のボルトが合わず、測りなおして作ったりした。スペクトル写真を撮影し、その現像もおこなった。参考にするデータは結局はアメリカのものを使っていた。これでは勝てないと思った。』⁴⁴⁾

玉泉中学校

「材料研究部で、塗料などの品質テストをする班に配属された。塗料のテストといっても、あまり本格的なものはなく、いきおい私も殆ど仕事がなかったが、ある職員が

『アメリカの塗料は品質が良くて、飛行機に塗ってもいつまでももつが、日本の一度海の上を飛んだりするとボロボロになってしまう』と口惜しそうに言っていた。⁴⁵⁾

「治具を作る作業をした。たがねを左手に持ち、右手の半拳大のハンマーで、笛の合図とともに万力に挟んだ鉄板を切っていく。…毎日が鉄板を挟み込んだ万力との格闘で、右手のひらの肉刺は潰れては出来、また潰れる。一か所に 30 個ぐらいは出来たと記憶している。その部分の皮膚はなめし皮のように厚くなったが、その後は出来なくなった。左手人差し指と親指は誤ってハンマーで打つため 2~3 倍に腫れ上がり、手袋に手が入らなくなる程だったが、その内に慣れ、自分の手指を叩くことも少なくなった。そんなある日、女学生が先方から通路を歩いて来たのだが、チラッとその方を見た瞬間、自分の指を叩き、血が飛び散った。女学生がアッ、と目覆うのがわかったが、女の子の前だ。私は痛いのも我慢して作業を続けた。」⁴⁶⁾

d 農耕の仕事

日大第二中学校

「入所式もなく、いきなり三鷹研究所の敷地にあった買収したままの農地で働くことになった。徴用されて来ていた植木屋さん・土建屋さん・お蕎麦屋さんが農作業を指導した。担任教員も来て監督した。各人に 1 日の作業が割り当てられ、それが終わると仕事は終わりだったため、がんばって作業をした。

すでに耕されていた畑に南京豆、かぼちゃ、すいか、うり、とうもろこし等を植え付け、収穫した。田もあって田植えをした。養豚もおこなわれていた。堆肥作り、残飯運送もおこなった。一番大変だったのは草取り。蛇を捕まえて焼いて食べたことがある。

大部分の生徒はこの作業に不満はなかったと思う。ただ『戦争なのにこんなことをしていていいのかなあ』という気はした。中には『飛行機を作りたい』と言っていた人もいた。担任教師は思索的な人で『負ける戦争だ。農園にいたほうが時間があって勉強ができるから、工場よりもいい』という意味のことを言っていた。

そのうち収穫物が持ち去られたり、豚がいなくなるというトラブルが起こった。さらに農業指導をする人の一人が乱暴で、教員を殴った。生徒は腹を立て、みんなで農作業をやめてしまった。これが会社につたわったせいか、配置換えとなり機体部門の格納庫や会計課などに移動した。移動してから、すいかやうりを食べられなかったのがしゃくだから食べてやろうと夜、農園に 4~5 人で行ったら捕まって思いっきり殴られた。」⁴⁷⁾

玉泉中学校

「そのうち工場の大部分が東北に移転し、私達治工具班は農耕隊となった。畑仕事のための鋤を作る位はお手のものだった。鉄板を切り、形をつけて焼きを入れ、柄をつければそれで出来上がり。本当のお百姓さんの鋤のように立派に出来上がった。畑は笹の生えた荒地を耕す大変な作業だったが、時には桜の木にのぼって小さな桜んぼを取り、

桑畑に入って桑の実を食べるなど、自由な時間が結構あって楽しい毎日だった。自分達の植えたサツマイモ畑で草取りをしていた時、銀紙のテープのようなものが太陽光を受けながらキラキラ上空から沢山落ちてきた。米軍機がまいた電波妨害をするためのものだ。日本の戦況が悪く、降伏するようにと書かれた桃色の紙も舞ってきたりした。』⁴⁸⁾

e 運送

日大第二中学校

「自分は運輸課に属し、古いバスの座席をとって、そこにご飯や味噌汁やカレーを入れた肥え桶のような容器を置く『食堂車』を運転して、多磨霊園の裏や石屋に疎開していた工場の人達などのために、昼食を配ってまわった。ガソリンは貴重で、その排気ガスをいい匂いだと思い吸って歩いた記憶がある。代用燃料としてメタノールを使った。薪や木炭を燃料とする車の排気は真っ黒だった。』⁴⁹⁾

三鷹第一国民学校

「完成したエンジンを群馬県の太田にトラックで運んだ。1台のトラックに2基のエンジンを積み、さらに発動機部門で雑用をしていた学徒がそれに乗り込んだ。手動の滑車でエンジンの積み下ろしを行なう。太田の方に向かうと決まったようにあぜ道で機銃掃射を受けた。トラックを降りて、大きな木の敵機の反対側に回れば安全なのだが、そこまでいけず、田んぼの土手に隠れたこともある。銃弾がピシッと土手をかすめて飛んでいった。トラックがやられて1~2台炎上したこともある。そんな危険な作業なのだが、それでも干しブドウや牛乳の特別な配給があるのでやりたかった。』⁵⁰⁾

f 事務

東大文学部

「企画課に配属され、太田製作所の見学に行った。そこで目にしたのはエンジンの装着を待っている機体の列だった。機体の生産にエンジンの生産が追いつかないのだった。これを見て、かねてから中島飛行機では、技術部門に較べ事務部門が軽視されていると感じていたのだが、もっと事務部門が生産を計画的にリードしなければならないのではないかと考えるようになった。』⁵¹⁾

「勤労課で課せられたのは、いかにして勤労意欲をたかめるかというテーマで作文を書くことであった。『ローマの奴隷の勤労意欲は』などと原稿用紙の枡を埋めていくようなまったく無為なことをやりながら、大学卒に相当する月給を貰っていた。

運輸課に移動しても、配車伝票を整理するぐらいの他はほとんど仕事はなかった。Iはゴッホの画集をもってきて絵の解説をやり、詩をタイプで印刷し、短いドラマをつかって決して上演されることのない、そのドラマの舞台装置を懸命に考えて図面を作ったりした。そのころよくエラスムスとルターについて語りあった。それは彼らの冷静・良

識と、独断・独善・偏見が我々のおかれた状況の中で最も関心のあることだったからである。

ある日の午後、火鉢を囲んで雑談をやっているところに、I がやってきた。T 技師は I をみかけるや、お前はファイトがないぞ、とハッパをかけた。I はそれをうけて、『僕は消極的なファイトをだしております。その辺をブラブラ歩くとか、満員電車の中で押されたときに、ウツというとか、その状態の中で他人の顔をながめているとか、そんなことがおもしろくてならないのです』と受け答えた。T 技師は逆上ぎみになって、勝ち抜くことにすべてを注ぐべきで、個人的なそんなことは愚にもつかないことだと、そのことだけを反復する。I は『じゃ、どちらがもっとも人間的に生きたか競争しようじゃありませんか』とあって、その場を立ち去った。』⁵²⁾ 三鷹研究所で学徒が反抗的な姿勢を示した例は今のところ、これが唯一である。

5.4. 通勤

第五高等女学校

「中央線は…詰まる限り人が詰まる。電車の各出入口中央部の、白い握り棒のそばに立てば悲劇的。人波と棒に挟まれ、急停車の度にろっ骨にヒビが入ることも稀ではない。『痛い、苦しい』の悲鳴を聞かぬ日はない。…だれかの背負う鉄カブトが、閉まるドアのガラスを音をたてて突き破る。破片が車外にとび散り、電車に乗り損ねたホームの人たちを見舞う。割れたガラスの補充はきかず、ドアといわず窓といわず木片が当てがわれる。かくて昼でも薄暗く不気味で無残な電車となる。』⁵³⁾

「武蔵境駅前は、広々とした野菜畑が続き一面の緑が風に揺れていた。こんなに人の心を慰める美しい緑の畑の続く風景があるのに片や空襲で焼け爛れた瓦礫と化した風景が、東京中にあることがウソの様だった。』⁵⁴⁾

「帰りには点在している農家に寄り道して野菜やお芋などを分けて貰い、リュックに背負って帰り、家族の食料の足しにした。配給のわずかの米、大豆、大豆粕、時々来るへんにアンモニア臭のするサメや助惣鱈などではとても栄養も足りないし、第一お腹がもたない。年端もゆかぬ娘が野菜を背負って行くのがどう映ったのか、農家の主婦は帰りぎわに畠の苺を五、六粒摘み採って私の手のひらに乗せてくれた。お菓子も果物も手に入れにくいこの時代、これはまるで宝石のようだった。口に放り込みたい衝動にかられながらも弟の顔が浮かび、手提袋の上にそっと乗せた。家に帰ると母は喜んで、空襲の時お腹に巻き付けて逃げたご先祖の位牌にお供えしてから皆で苺を一粒ずつ戴いた。燈火管制下の薄暗い食卓の廻りでも皆の笑顔がはっきり見えた。』⁵⁵⁾

玉泉中学校

「武蔵境駅北口に集合し、点呼をとり、日の丸に「神風」と書かれた鉢巻をしめ、軍歌『万朶の桜か矜の色…』『花も蕾の若桜…我等学徒の面目ぞ ああ紅の血は燃ゆる』

を歌いながら工場へ行進した。』⁵⁶⁾「4 列縦隊に隊伍を組み、国防色（カーキ色）の学生服に編上げの靴、その上にゲートルを巻いて靴音高く軍歌を斉唱しながら、曲がりくねった砂利道を工場へ通っていた。』⁵⁷⁾

玉泉中学校では、動員前から電車通学の生徒が駅前に集合し、学校まで行進していたという。軍歌は学校に配属された将校が特に力を入れて指導したという⁵⁸⁾。なお、機械工業学校の生徒の一部も武蔵境駅前から行進したというが⁵⁹⁾、ばらばらに通ったという学校も複数ある⁶⁰⁾。

「昭和 20 年 3 月 10 日の東京大空襲を契機として、B29 の焼夷弾投下とグラマンに依る機銃掃射が一段と烈しくなって来た。自分は当時東横線沿線に住んでいたので、前夜の空襲で私鉄も省線も全て不通になった時などは、暗い内に起き、渋谷経由で鉄道を延々と歩いて鷹研へ辿り着いた事もある。今から思えば恐るべき？気力と体力であり、産業戦士としての面目躍如たるものがあつた。町々が焼野原になって残り火が燃え、黒焦げの死体がそこここに放置されて異臭を放ち、それはまぎれも無い悲惨な光景だった。』⁶¹⁾

「先生方の配慮で是政線（現、多摩川線）新小金井駅まで乗るようになって、随分楽になった。旧式 SL に箱型の客車で、車掌は女性が当たっていた。発車の時ドアを中から閉めてしまう悪戯などして面白がったものだった。』⁶²⁾

5.5. 服装

第五高等女学校

「服装は工場支給の、触るとざらざらするスフの国防色の上着と、すそにゴムが入ったズボン。胸には氏名、血液型を書いた布を付けた。大きな厚さ 3cm ほど綿が入った防空頭巾と救急袋をたすきがけに肩にかけ、布製の編み上げ靴を履いていた。』⁶³⁾

機械工業学校

「麻袋のような粗末な生地のカーク色の作業服を着ていた。それがあまりに油まみれになったので、兄のお古の紺の詰襟の学生服を着たことがあつた。そうしたら学校の工員出身の教官に贅沢だと注意された。これしかないのになにを無茶なことを言うのだ、冗談ではない、と本当に腹が立った。』⁶⁴⁾

三鷹第一国民学校

「国防色の私服を着て通勤したが、作業着は会社から支給された。ロッカーがあつてそこで着替えるが、しらみがひどかつた。他の人の服についたしらみが移ってくる。昼休みになると縫い目に隠れているしらみを、発動機試作工場の南側の日当たりのいい所に熟練工も学徒もずらつと並んで座り、爪でプツプツと潰していた。』⁶⁵⁾

東大文学部（東北疎開担当者）

「東北の疎開先では機密保持のため戦闘帽を被るよう命じられていたが、せめて学徒

の会合の際には角帽を被ると、学徒の間で決議したことがあった。大学生としては角帽が誇りだったし、疎開にあたっては、自分たちがずいぶん大きな役割を果たしたのに、疎開工場の落成式には学徒は呼ばれず、軽視されていると感じたことへの不満のあらわれだった。」⁶⁶⁾

5.6. 待遇

a 労働時間

東大文学部

勤務内規は 8 時 30 分から 17 時。3 月からは 7 時 30 分から 5 時 30 分⁶⁷⁾。

他の学校の場合も朝 8 時頃から仕事が始まり、夕方には帰ることが出来たとのことである⁶⁸⁾。ただし次の例は違う。

機械工業学校

「発動機試作工場の自分が配属された罫書きをする部署では、朝 7 時から夜 7 時までの 12 時間労働だった。定刻は 5 時までだが、いつも 2 時間の残業があった。これは辛かった。残業になると野菜ばかり煮たすいとんが出た。」⁶⁹⁾

ある元熟練工によれば「24 時間勤務もあった。昼の 12 時間は学徒や徴用者を指導して簡単な部品を工作機械を使って作り、そのまま夜の 12 時間は自分たちだけで複雑な部品を作った。」⁷⁰⁾ このような方法で発動機試作工場の一部では、限られた数の機械で最大限に熟練工と未熟な学徒・徴用者の労働力を活用しようとしたようである。さらにここでは学徒であっても徹夜させられたとの声もある⁷¹⁾。

土曜日は平日と同じ。一般の従業員は第一・第三日曜日のみ休みであったが、学徒は毎日曜日が休みだった⁷²⁾。

b 報償金

学校ごとの学徒報国隊に対して一括して「報償」が与えられた。1944 年 5 月に文部省から発せられた「工場事業等学徒勤労働員受入側措置要綱ニ関スル件」によれば基本報償算定基準（月額）は次の通りである。男子。大学 70 円、専門学校 60 円、中学校 3 年以上 50 円、中学校 2 年以下および国民学校高等科 30 円。女子。中等学校 3 年以上 40 円、中等学校 2 年以下および国民学校高等科 28 円。これに特別報償や通勤手当などが加えられ、授業料等が差し引かれた⁷³⁾。

三鷹研究所での記録や記憶もほぼこれに合致する⁷⁴⁾。ただしもらった記憶はないというケースもある⁷⁵⁾。

ちなみに 1944 年の物価例としては、白米 2 等 10kg 3 円 57 銭。食パン 1 斤 26 銭。牛肉 1 等 100 匁 (375g) 1 円 53 銭。しょうゆ 1 升 77 銭。日本酒 1 級 1 升 12 円。入浴料 12 銭。巡查初任給 45 円⁷⁶⁾。

しかし当時、食料など生活必需品は配給制であり、贅沢品はなく、現金があっても買うものがなかったというのが実情だったようだ⁷⁷⁾。

c 食事

三鷹第一国民学校

「毎日同じ班の従業員から食券を集め、食堂に持っていくのが日課だった。そうすると食堂では、食券に食事の時刻を指定して記入し押印した。この印がないと食券を出しても食べることはできない。このようにして必要な食事数を食堂は把握し、無駄を出さないようにしていた。」⁷⁸⁾

第五高等女学校

「唯一の楽しみは工場で出される昼食である。おかゆではない。大豆入りだが、れっきとした固いご飯がどんぶりに一杯。おかずがちゃんとついている。塩ぎけのこともある。コロッケのときもある。今どき香ばしい揚げものが存在するなんて夢のまた夢。私は感動のあまり涙ぐむ。食堂の配膳口からアルミのお盆にのった昼食を、わくわくしながらテーブルに運び、工具さんたちに混じって食べる。動員先の昼食のおかげで、命がつけるといえる。」⁷⁹⁾

重機工業学校

「初日、お昼になって鋳物工場から整列して食堂まで行進したら、食堂の窓から赤いご飯が見えた。自分たちの入所のお祝いをしてくれて今日は赤飯なのかな、と思ったらコーリャン飯だった。」⁸⁰⁾

玉泉中学校

「昼食ははじめのうち正門近くの第一食堂で、あとは機体工場南側の第二食堂で、麦飯や高粱飯を食べたりしていたが、第一食堂では時折そばでトラックがエンジンをふかすことがあった。代用燃料に使っていたピリジン（本来は金属研磨用の薬品）の刺激性の悪臭が辺りに立ちこめて、とても食べるどころでなく、食器を持って逃げ回ることもあって閉口した。」⁸¹⁾

「発動機工場を過ぎると、右側に食堂があった。ここの厨房で働いている人は殆ど女の人で、皆ころころとよく太っていた。冬でも腕まくりをして、大きな声でガヤガヤと喋っていてとても元気がよかった。食事をするには、まず行列の後に並んで、自分の番が来たら食券を出すと、大豆のいっぱい入った飯や、お赤飯だと思った高粱のいっぱい入った飯をドンブリに盛ってくれるのだが、はじめにドンブリにいっぱい入れて計りに載せてゴツソリ減らすのを見て、いつもあーあと嘆いていた。オカズはひじきの煮たのが多かった。」⁸²⁾

d 配給

台湾産の乾燥バナナ⁸³⁾。牛乳。大きな瓶に入ったものを有償で各自持っているコップに注いでもらった⁸⁴⁾。食用ヤシ油やピーナッツ⁸⁵⁾。イモの茎を粉にしてカステラのような団子にしたもの。食べられたものではなかった⁸⁶⁾。草餅。ピール。樽に入ったものを柄杓で飲んで酔ったことがある。胸囲が狭く結核の恐れがあるというので毎月特別にバター⁸⁷⁾。柿⁸⁸⁾。

軍需工場なので士気を高めるためにこれらのものが時々配給されたようだ。ただし部署によってかなり差があったようだ。配給を受けた覚えがないというケースもある⁸⁹⁾。

第五高等女学校

「生理の日、昔は脱脂綿を使うのが普通だったが、それも中々手に入らなくなり、皆家庭で洗いざらしの木綿やガーゼなどをそれにあてていた。或る日、生理用品の配給があるというのでそれを使った時の事だ。昼休みにトイレに入ると、まわりは紙で出来ているそのナプキンが破れ、中からなんとおがくずがバラバラと大量にこぼれて床にとび散った。工場のこととて女性用トイレが少ないため、ドアの外には大勢並んで待っている人も居て、どうして掃除したものかと、独りあせった。」⁹⁰⁾

5.7. 空襲

1945年2月17日午前、数機の艦載機が三鷹研究所にも襲来し、4人が死亡した⁹¹⁾。その時の学徒の体験を示す。

航空工業専門学校

「警報が出ていたのだが、自分はトイレに入っていてゆっくりして出たらすでにみんな避難していた。研究本館の北側の窓から見ると、武蔵境駅の方に黒い煙がたちこめていた。F6F や F4U が弾幕をぬってこちらに飛んできた。写真ではよく見ていたが実際には初めて見るアメリカの戦闘機だった。1列になって飛んできた。パイロットが顔を出して笑っているのが見えた。研究本館の南西のあたりに材木を鳥居状に組んで1mほど土を盛った防空壕が5~6個あり、その一つに飛び込んだ。隣の防空壕にはロケット弾が打ち込まれ、土が崩れて後で担架でそこから運び出された人もいたが無事だった。」⁹²⁾

機械工業学校

「4~5機のグラマンが襲来した。低空飛行でパイロットの顔が見える程だった。発動機試作工場の西側には、土の階段を降りて入る防空壕が一行に並んで掘られていた。やっと立てる程の高さで7~8人入れた。組ごとに入る壕が決まっていた。爆弾が投下され、ものすごい音がして防空壕が崩れた。2月で土が凍っていたが、自分はやっと這い出した。すぐ隣の防空壕に爆弾は落ち、工員が亡くなったと聞いた。」⁹³⁾

東大文学部

「2月、艦載機の空襲により4名の工員が壕で生き埋めになった。葬儀が深大寺で行なわれた。副社長と監督官の2通りの弔辞原稿を頼まれた。副社長の方をより哀悼の意をこめて書くようにとのことであった。」⁹⁴⁾

その後も艦載機の襲来は度々あり、1945年4月からは硫黄島から発進した陸軍機P51も飛来した。2月17日以来、勤務中の空襲は十数回に及んだという⁹⁵⁾。

第五高等女学校

「機銃掃射を恐れて近くの森迄避難させられる事があった。一刻も早くその森迄行って隠れねばならないので、皆我勝ちに工場の用意してある自転車に飛び乗って逃げる。この工場へ来て何度目かの空襲の日、いつもの様に自転車にとび乗り、森を目指して工場わきの坂をまっしぐらに駆け降りている真っ最中のことだ。背後にキーンというあの低空に降りてくる爆音を感じ、地面に伏せようと夢中でブレーキを踏んだのだが、ブレーキがきかないのだ。逃げるのが先で故障のチェックなどする余裕はなかった。瞬間的に自転車を右方向に向けて深い大きな溝に突込み、自転車諸共落ちた。此の溝が結果的には深い塹壕の役をして私を弾から守ってくれた。」⁹⁶⁾

「5.2. 入所式」で述べたように、1944年11月からはB29が上空を飛行するようになっていた。

航空科学専門学校

「調布飛行場から『飛燕』が3~6機飛び立つので、B29が来るのは警報前にわかった。警報が鳴ると防空壕に入った。研究本館の南西の丘に入口があり、階段で深いところに降りる立派なものだった。横穴が枝分かれしていた。しかしB29がやってくると入口のところでみんなで眺めていた。B29の編隊が高空をきらきら光って飛んでいくのはきれいだった。B29の上から『飛燕』が接近して体当たりし、胴と翼に分解し、パイロットの落下傘がぱっと開くのを見たことがある。みんなで拍手喝采した。」⁹⁷⁾

5.8. 疎開作業

玉泉中学校

「空襲も多くなり、B29の他に艦載機のグラマンやP51が度々来襲するようになって、機体工場の中の我々のような小物を作る班は、多磨霊園の入口に並んでいる石屋さんの作業場に疎開することになった。作業台やプレス、ボール盤といった大きい物は、荷車に載せ、それを牛に引かせての一眼のんびりした引越しだったが、人が持てる物は皆で毎日毎日背負って運んだ。この石屋さんの作業場へ歩いて行くには、機体工場の裏の雑木林の中を歩いては政線の線路に降り、少し先の鉄橋の枕木の上を渡り、線路に沿って多磨霊園へ行くのが近道だった。日に何度も往復するのは楽ではなかった。いつの時代

にも知患者はいるもので、我々の隣の班では、研究所内の防空壕を掘るところで使っていたトロッコを改造して車輪を是政線の線路の幅に合うように広げ、荷台もバラバラにして人が手で運べるようにして草陰に隠していた。そして汽車が通らない時間を見計らって手早くトロッコを組立て、荷物をそれに載せて勾配を利用し、面白いように走り去って行った。」⁹⁸⁾

東大文学部（東北疎開担当者）

「1945年3月から黒沢尻に腰を落ち着け、疎開の受け入れ体制を整えた。雪の国道を、時には傘などまるで役に立たない吹雪の中を歩いて、工場にするのに適当な施設を探し求めた。結局、横川目を中心に工作機械を疎開することとし、小学校の講堂と村の芝居小屋を提供してもらった。一時は会計のことまで担当した。」⁹⁹⁾

このように疎開の準備まで学徒がした例は稀だという¹⁰⁰⁾。

『剣』の生産を、仙台の東北地区軍需監理官に報告した。生産の目標機数は達せられていなかった。そのためなぜ計画どおりに実行できなかったかを作文することが、我々の仕事となった。資材や人員確保のために、とても実現不可能な生産計画をたて、申請書を提出する時には、良心のうずくのを覚えた。」¹⁰¹⁾

5.9. 終戦時

第五高等女学校

「天皇のラジオ放送の後、1時間もたたないうちに、工員たちが次々と工場内の物資を勝手に持ち運びだした。さらに発動機試作工場の高い窓のところによじ登り、灯火管制のための厚い黒いカーテンを外しだした工員もいた。自分たちが見つめていると、その人はきまり悪くなったのか、カーテンを3mほど切って投げてよこした。自分はそのカーテンを抱えて家に帰り、2度と三鷹研究所には行かなかった。そして戦後、銀行に勤務することになった時に、それをブラウスとスカートに自分で仕立てて通勤着にした。」¹⁰²⁾

玉泉中学校

「終戦の翌日工場へ行くと、先生が皆を本館裏の空地に集め、『こういうことになって本当に残念だ。天皇陛下もお若いのであるから、我々は今度はしっかりやって、陛下にご安心願わなければならない。』と訓示された。『今度はしっかりやる』とは、もう一度戦争をやって米英に勝つことだ、と単純に思い込んでしまった。工場内では、敵の手に渡すよりは、と色々な書類や作りかけの飛行機などを空地に運び出し、次々と燃やし、2、3日の間真夏の青空に黒煙が上り続けた。皆がつい先頃まで精魂込めて作ってきた『剣』の胴体も燃やされて、リベットだけ溶け、鉄板は折れ曲り、黒焦げの無残な姿をさらしていた。」¹⁰³⁾

東大文学部（東北疎開担当者）

「広島に投下された爆弾は原子爆弾であろうという話を聞き、急いで学生の手で『富嶽』の生産計画を立てることを考えた。『富嶽』の設計はある程度出来ているという話を聞いていたからだ。そして東北疎開に従事している学徒を結集して、黒沢尻で8月20日からその可能性を検討する長期合宿をおこなうことを決めた。しかしその合宿の開始前に終戦となった。東北では実感が湧かなかったが、確認のため東京に行ってみると人々はほっとしている様子で、それを見て初めて敗戦を認識した。」¹⁰⁴⁾

6. おわりに

三鷹研究所の学徒も、当時の軍国主義的な教育に深く規定されていたことは、以上の記述からも十分に理解できよう。意欲を持って入所し、重労働に耐えた学徒もいた。しかし三鷹研究所自体がすでに戦争には間に合わない施設であり、学徒がおこなう仕事がほとんどなかったケースも散見される。

重機工業学校

「機体の鋳物工場にいたがする仕事も少なく、これで戦争に勝てるのかと思った。そこには10人ぐらいいたが、親方の職工も雑談をしていた。」¹⁰⁵⁾

第五高等女学校

「仕方ないから動員学徒を受け入れたと思われる様な中で、別に今ここで学業を止めてまでしなければならぬとは思えない製図の書き方の基礎のようなものを習っているのだから、どうしても気合が入らない。」¹⁰⁶⁾

次のような声もある。

日大第二中学校

「試作工場で中学生が役立つことをするのは無理だった。自分たちは試作機が出来て原図の仕事がなくなったので運輸課に移動したが、仲間同士誘い合っただけであり、指令もはっきりしなかった。けじめもなく、流されていた感じの1年間だった。」¹⁰⁷⁾

社会の維持・発展に必要な学びの場から引き離されたものの、労働力として合理的に用いられることもなかった軍国少年・少女の姿は、「総力戦」による社会の自壊を示すものと言えよう。

注

- 1) 三鷹研究所の資料は終戦時にほとんど焼却された。現時点で調査を進めるためには聞き取り調査に頼らざるをえない。であるからこの調査は、「人々の記憶の中の三鷹研究所」の調査となる。2002年から2005年9月上旬までに、筆者に何らかの形で三鷹研究所について情報を提供してく

ださった方は 70 名である。面接をし、その主要部分を録音したケースが 48 件。電話のみの調査で録音がないケースが 15 件。手紙などを送っていただいたケースが 7 件である。本稿では個人名は公表しないが、その方の立場、聞き取り調査の日付と方法は脚注で示した。さらに情報提供者についての情報を得たい方は、筆者への直接のお問い合わせを願います。

なお、2002 年 6 月 8 日に筆者も属する市民グループ「武蔵野の空襲と戦争遺跡を記録する会」は ICU の見学会を行なった。その参加者のアンケートから、さらに聞き取り調査を進めることができた。この会の開催には ICU の学生グループ「地下壕研究会」のご協力を得た。そのメンバーと、顧問として関わってくださった笹川紀勝教授に感謝を申し上げる。

- 2) 情報提供者 70 名中、三鷹研究所で働いていた方は 52 名である。その内 31 名が元動員学徒である。

なおこのテーマの先行研究としては齊藤勉『東京都学徒勤労働員の研究』のんぶる舎、1999 年がある。153-156 頁・515-519 頁に三鷹研究所に動員された学校（5 校）と東北疎開についての記述がある。

- 3) 牛田守彦・高柳昌久『戦争の記憶を武蔵野にたずねて』ぶんしん出版、2005 年には、三鷹研究所の概説・現存するその痕跡・主要な参考文献が記されている。

三鷹研究所の東北疎開については、武蔵野の空襲と戦争遺跡を記録する会発行の『戦争のきざあと・むさしの』13-17 号（2004 年 10 月-05 年 7 月）に筆者が 5 回にわたり連載した。

聞き取り調査を含めた情報源を示しつつ、三鷹研究所の全体像を描くことは今後の課題である。

- 4) 前掲『東京都学徒勤労働員の研究』39-56 頁、戦時下勤労働員少女の会『記録—少女たちの勤労働員』BOC 出版部、1997 年、8-15 頁。

- 5) 1944 年度の動員開始時点における学年と年齢・生年を以下に示す。中学校・高等女学校・実業学校の 5 年生が 17-16 歳で 1927-28 年生まれ、4 年生が 16-15 歳で 1928-29 年生まれ、3 年生が 15 歳-14 歳で 1929-30 年生まれ、2 年生が 14-13 歳で 1930-31 年生まれ、1 年生が 13-12 歳で 1931-32 年生まれである。

国民学校高等科の 2 年生・1 年生は、この 2 年生・1 年生と同じ年代である。

なお、中学校・高等女学校・実業学校の 4 年生だった学徒は 1945 年 3 月、繰り上げ卒業となり 5 年生と同時に卒業した。ただし卒業後も「専攻科」に進学する形でそのまま継続して動員される場合もあった。修業年限に達しない学徒は 1945 年 4 月に 1 学年進級し、終戦まで継続して動員されることとなった。

本稿で扱う 2 つの工業系の専門学校には、中学校修了者が進学した。

大学には中学 4 年又は 5 年修了者が高等学校（修業年限 3 年。ただし 1943 年から 2 年に短縮）を修了した後入学した。本稿で扱う東大文学部学徒の場合、入学は 1941 年 4 月から 1945 年 4 月までであり、年齢にはかなり幅がある（前掲『東京大学史紀要』第 17 号、30-53 頁）。

- 6) 人数、時期については、本文中に示した各校の記念誌・文集などの記述による（②『ふたたびくりかえすまい』175 頁。人数の記述はなし。③記念誌 33 頁。④記念誌 246-247 頁。3 年の人数の記述はなし。⑤記念誌 161 頁。人数の記述はなし。⑥文集 38・42 頁。⑨山田誠前掲書 124 頁。ただし佐藤東喜彦の体験記によれば人数は 81 名であるという。⑩『東京大学史紀要』第 17 号 38-41 頁。⑪記念誌 48-50 頁。⑫記念誌 70 頁。人数の記述はなし）。

それ以外は各校の元学徒からの聞き取り調査などによる（①2004年6月19日元学徒5名との面接。②人数については2002年5月28日付け元学徒からの手紙。⑤人数については2005年8月12日元学徒との電話、2005年8月13日元学徒との面接。⑧2002年7月18日元学徒との面接。○三鷹第二国民学校については2002年9月20日元学徒との面接）。

- 7) この中には『飛行機メカニズム図鑑』グランプリ出版、1985年などの著書があるイラストレーター出射忠明がいた。同書にはキ87、「剣」のイラストが掲載されている。
- 8) ②は1939年の設立。このころ軍需産業の急激な成長により、大量の技術者が必要とされたため、工業学校・工業専門学校が増設された。③⑧は1943年の設立、⑨⑩は1940年の設立である（②③⑩は本文中に示したそれぞれの記念誌に、⑧⑨は『東京都立大学五十年史』同大学、2000年による）。
- 9) 『35年の歩み1976 東京都立桜水商業高等学校』同校、1977年、71頁。
- 10) 碓義朗『決戦機疾風航空技術の戦い』光人社、1996年、291頁・302-303頁。
- 11) 戦後米軍が作成した資料・USSBS資料 USB-13. Roll. 222A（国立国会図書館憲政資料室）、コマ番号799によれば1944年12月に荻窪製作所（発動機部門）の試作部門のほとんどと研究部門が三鷹研究所に移転したという。2002年8月7日に面接した元発動機部門技師は、1944年の春、荻窪製作所からハ54の設計のため三鷹研究所に移り、それが中止となった同年8月、荻窪製作所に戻り、同年12月、再び三鷹研究所に移動したという。
- 12) 同書では「剣」が実戦に使用されたことになっているが、「剣」の審査主任であった高島亮一「回想—キ115「剣」第7回、『航空ファン』文林堂、1993年7月号、171頁によれば、これは誤りである。
- 13) この中には後の芥川賞作家田久保英夫がいた（『田久保英夫・新潮現代文学75』新潮社、1981年、369頁）。なお彼の作品「解禁」には動員中の体験をデフォルメしたと見られる記述がある（同書275-276頁）。
- 14) 2005年9月3日元第五高等学校学徒との電話より。当時はすでに学年の半数約100名が疎開していたという。
- 15) 元玉泉中学校学徒からの2003年3月28日付け手紙、前掲『玉泉』66頁による。
- 16) 東京市役所編纂『東都学校案内昭和4年版』三省堂、1928年、101頁には、この学校は「本所区横綱町2丁目10番地」にあり、入学資格は高等小学校2年もしくは中学2年修了程度、修業年限は3ヵ年、学科は商業学校規程に依る、とある。
- 17) 2003年3月12日元東京貿易植民語学校学徒との電話によれば、後藤康雄「それでも生きていた親友」府中市社会教育課『戦争の記憶と平和へのおもい』同課、1998年は、元同校学徒が三鷹研究所の発動機試作工場での思い出を書いたものである。
- 18) 女子美術学校については2002年7月16日元会計課職員との面接、2002年7月18日元航空工業専門学校学徒との面接、2002年8月7日元発動機部門技師との面接による。2005年9月1日元機体部門工作研究班技師補との面接によれば、太田製作所の機体部門の一部が三鷹研究所へ移転する時、女性トレーサーを移動させることは彼女たちが家庭を持っていたため難しかったので、三鷹研究所では女子美術学校学徒をトレーサーとして用いたのだという。

横浜高専については2002年4月27日元機械工業学校学徒との面接、前掲『玉泉』44頁による。

- 19) 三鷹研究所の従業員の総数は、機体部門については青木邦弘『中島戦闘機設計者の回想』光人社 1999年 181頁、機体部門・発動機部門双方については 2003年 8月 25日 元発動機部門事務員との面接、2004年 3月 17日 付け元会計課係長の手紙による。
- USSBS 資料 USB-13. Roll. 222A、コマ番号 813・816 では、1945年 2月の時点で発動機部門には 3,030人の従業員がおり、そのうち学徒は 510人、機体部門には 1,493人の従業員がおり、そのうち学徒は 163人いたとされている。ただこの資料には、コマ番号 813・816 と矛盾するデータがコマ番号 812 にあり、あまり信用できない。
- 20) この節以降の「 」内は脚注で示す聞き取り調査や体験記などを、筆者が要約したものである。
- 21) 2005年 1月 18日・2005年 2月 8日の 1名づつ計 2名の元航空科学専門学校学徒との面接による。
- 22) 2004年 6月 19日 5名の元日大第二中学校学徒との面接による。
- 23) 前掲『さわらびの記憶』37頁。これは 4年生がすでに動員されているとすれば、1943年 5月のアツツ島玉砕から 1年程経過した、1944年 4月から 7月にかけての出来事と思われる。
- 24) 前掲『武蔵野女子学院五十年史』246頁。
- 25) 前掲『玉泉』35頁。
- 26) 2002年 6月 21日 付け元機械工業学校学徒の手紙より。
- 27) 前掲『玉泉』40頁・66頁。
- 28) 2005年 7月 29日 元玉泉中学校学徒との面接より。
- 29) 前掲『玉泉』38頁。
- 30) 前掲『玉泉』66頁。
- 31) 牛田守彦「中島飛行機武蔵製作所への学徒勤労働員」武蔵野の空襲と戦争遺跡を記録する会『証言・学徒勤労働員』同会、2003年。
- 32) 前掲『玉泉』32頁。
- 33) 今のところ入所時に学校単位で同じ場所で訓練を受けたという例は、三鷹第二国民学校のみである。「今の西野の交差点の近くに訓練所があり、そこでヤスリ・ハンマー・ノギスの集中的な訓練を受けた。2名の兵隊に教えられたが、出来なければ殴られる、半端でない厳しいものだった。それでも出来ないと大沢の交差点まで走らされた。当時天文台通りは砂利道で、ろくな靴もないからこれはこたえた。」(2002年 10月 28日 元同校学徒との面接より)。
- 34) 2003年 8月 22日 元機械工業学校学徒との面接より。
- 35) 『富士重工業三十年史』同社、1984年、29-30頁には次のような記述がある。「未熟練工の比率が高まるにつれて作業の能率が悪くなるので、作業の分業化、標準化を徹底して推進し、科学的管理法と呼ばれるテーラーシステムを参考にした班別請負方式が大きな効果をあげた。班長を中心に組別に作業が行われ、各組を競わせて能率向上を図った。組長に実権を与え、能率を上げると多額の褒賞金を支給する仕組みで、弊害もあったが、それなりに増産に寄与した」。
- 36) 当時は憲兵が軍需工場を周辺を含め監視し、工場内では軍人(監督官)が労働を監督していた。
- 37) 2005年 8月 13日 元三鷹第一国民学校学徒との面接より。
- 38) 2004年 6月 19日 5名の元日大第二中学校学徒との面接より。うち 2名は格納庫の中の原図の部署にいた。
- 39) 2004年 6月 19日 5名の元日大第二中学校学徒との面接より。うち 1名は格納庫の中の小さな部

- 品を作る部署にいた。
- 40) 2002年10月28日元三鷹第二国民学校学徒との面接より。国立天文台で望遠鏡を扱っていた職員の子弟で、ハンマー等を使う工作を得意とした。同級生と離れ、一人機体の組立に配属されたという。
- 41) 前掲『最後の特攻機「剣」』138-145頁。
- 42) 2002年7月18日元航空工業専門学校学徒との面接より。この話者はその後「剣」の脚の設計も手伝ったという。なお前掲『中島戦闘機設計者の回想』172・188頁には、技師から見た設計室の動員学徒の姿が記されている。
- 43) 2003年8月25日付け元機械工業学校学徒の手紙より。
- 44) 2005年1月18日元航空科学専門学校学徒との面接より。
- 45) 前掲『玉泉』40頁。
- 46) 前掲『玉泉』49頁。
- 47) 2004年6月19日5名の元日大第二中学校学徒との面接より。日大第二中学校学徒は当初全員農場で働いた。この農場は今の運転免許試験場（府中市）の敷地にあったという。なおこの是政線より西のエリアは、線路で三鷹研究所の中心部とは隔てられているため、本来は寮や社宅の用地だったと思われる（2002年12月14日三鷹研究所の敷地買収にあたった元中島飛行機社長秘書との電話より）。
- なお、碓義朗『さらば空中戦艦富嶽』光人社文庫、2002年、188頁の「学徒のストライキ」についての記述は、この5名の記憶とは異なるとのことである。
- 48) 前掲『玉泉』50頁。なお同じ農耕隊でも、日大第二中学校のそれが施設が未完成だった1944年春からのことであるのに対し、玉泉中学校のそれは疎開が進んだ終戦も近い1945年春からのことである。
- 前掲『東京大学史紀要』第17号、35頁によれば、終戦間際三鷹研究所に残った東大文学部学徒も、意欲の低下が見られた新入の動員学徒を反省させて勤労意欲を高揚させるため、研究所内の荒地の開墾を決定している。
- 49) 2004年6月19日元日大第二中学校学徒との面接より。「剣」試作機完成により格納庫での仕事が少なくなったので、運転免許を持っていた1名が最初に運輸課に移り、その後仲間を誘い、筆者が面接を行った5名とも運輸課で働くことになったという。
- 50) 2005年8月13日元三鷹第一国民学校学徒との面接より。運輸課に属する者としてではなく、発動機部門の雑用の一つとしてこのような仕事をしたという。
- 51) 2002年3月25日元東大文学部学徒との面接より。中島飛行機は発足当初から技術部門優先の組織であり、日中戦争の頃になっても事務部門は簡単なもので、そこでは大卒者はほとんど採用されなかったという（2002年7月16日元中島飛行機社長秘書との面接より）。
- 52) 前掲『学徒出陣の記録』177-181頁。
- 53) 前掲『さわらびの記憶』47頁。
- 54) 前掲『さわらびの記憶』45頁。
- 55) 前掲『さわらびの記憶』57頁。
- 56) 前掲『玉泉』46頁。
- 57) 前掲『玉泉』43頁。

- 58) 2005年7月29日元玉泉中学校学徒との面接より。
- 59) 2002年11月10日元機械工業学校学徒との電話より。
- 60) 2004年6月19日5名の元日大第二中学校学徒との面接より。2005年8月13日元三鷹第一国民学校学徒との面接より。2005年8月25日元第五高等女学校学徒との電話より。
- 61) 前掲『玉泉』54-55頁。なお当時の是政線の客車の東側の窓には白い紙が貼られ、調布飛行場や三鷹研究所が見えないようにされていたという(2002年8月16日元機体部門設計部職員との面接より)。
- 62) 前掲『玉泉』68頁。
- 63) 2002年5月11日元第五高等女学校学徒との面接より。
- 64) 2002年11月10日元機械工業学校学徒との電話より。
- 65) 2005年8月13日元三鷹第一国民学校学徒との面接より。
- 66) 前掲『東京大学史紀要』第17号、58頁・2002年3月25日元東大文学部学徒との面接より。
- 67) 前掲『東京大学史紀要』第17号、36頁。
- 68) 2002年4月27日格納庫に配置された元機械工業学校学徒との面接、2002年7月18日研究本館の設計に配置された元航空工業専門学校学徒との面接、2003年3月28日付け研究本館の材料研究に配置された元玉泉中学校学徒の手紙、2004年6月19日農場・格納庫・運輸課に配置された5名の元日大第二中学校学徒との面接より。
- 69) 2002年11月18日元機械工業学校学徒との面接より。中島飛行機の労務管理については高橋泰隆『中島飛行機の研究』日本経済評論社1988年を参照。
- 70) 2003年8月29日元発動機部門工具(旋盤担当)との面接より。
- 71) 2003年8月22日元機械工業学校学徒との面接より。この話者は発動機試作工場でミーリングを担当した。そこでは現、武蔵野日赤病院の敷地に置かれた高射砲の部品も作られたという。
- 72) 水谷総太郎『中島飛行機エンジンとともに』酣燈社、1999年、113頁、2003年4月1日付元玉泉中学校学徒の手紙より。
- 73) 前掲『記録一少女たちの勤労働員』93頁。
- 74) 前掲『東京大学史紀要』第17号、45頁、2002年5月11日元第五高等女学校学徒との面接、2002年7月18日元航空工業専門学校学徒との面接、2002年10月28日元三鷹第二国民学校学徒との面接、2003年8月21日元重機工業学校学徒との電話、2005年7月29日元玉泉中学校学徒との面接などより。
- 75) 2002年4月27日元機械工業学校学徒との面接、2004年6月19日元日大第二中学校学徒との面接(5名中3名)より。
- 76) 原田勝正『昭和世相史』小学館、1989年、131頁。
- 77) 前掲『記録一少女たちの勤労働員』96-98頁。
- 78) 2005年8月13日元三鷹第一国民学校学徒との面接より。
- 79) 前掲『さわらびの記憶』34頁。
- 80) 2002年12月6日元重機工業学校学徒との電話より。
- 81) 前掲『玉泉』40頁。
- 82) 前掲『玉泉』56頁。
- 83) 2002年4月27日格納庫にいた元機械工業学校学徒との面接より。

- 84) 2002年5月11日発動機試作工場にいた元第五高等女学校学徒との面接、2005年7月29日格納庫にいた元玉泉中学校学徒との面接より。
- 85) 2002年7月18日研究本館にいた元航空工業専門学校学徒との面接より。
- 86) 2002年11月18日発動機試作工場にいた元機械工業学校学徒との面接より。
- 87) 2004年6月19日5名の元日大第二中学校学徒との面接より。その内の1名がバターと発言したとき、そんな貴重品を、と残りの4名からは驚きの声が上がった。
- 88) 2005年2月8日研究本館にいた元航空科学専門学校学徒との面接より。
- 89) 2002年10月28日格納庫にいた元三鷹第二国民学校学徒との面接。2003年8月21日研究本館にいた元重機工業学校学徒との電話。2004年3月28日研究本館にいた元玉泉中学学徒からの手紙。
- 90) 前掲『さわらびの記憶』57頁。これがどこで配給されたものかは不明だが、この「工場」は発動機試作工場である。
- 91) 前掲 USSBS 資料 USB-13. Roll. 222A、コマ番号 799 による。1945年2月16・17日の空襲は、米海軍が硫黄島への上陸にあたり、日本軍の増援を阻止することを目的に行った。中島飛行機武蔵製作所は全9回の空襲を受けたが、この空襲で最大の被害を受けた（前掲『証言・学徒勤労働員』120頁）。
- 92) 2002年7月18日元航空工業専門学校学徒との面接より。
- 93) 2002年11月10日元機械工業学校学徒との電話より。
- 94) 前掲『学徒出陣の記録』190頁。
- 95) 前掲『東京大学史紀要』第17号45頁。
- 96) 前掲『さわらびの記憶』74-75頁。
- 97) 2005年2月8日研究本館にいた元航空科学専門学校学徒との面接より。調布飛行場に配備された陸軍戦闘機「飛燕」のB29迎撃については櫻井隆『陸軍飛行第244戦隊史』そうぶん社、1995年参照。
- 98) 前掲『玉泉』58-59頁。
- 99) 前掲『学徒出陣の記録』191頁。
- 100) 前掲『東京都学徒勤労働員の研究』515頁。
- 101) 前掲『学徒出陣の記録』191頁。
- 102) 前掲『昭和に生きて』26-31頁・2002年5月11日元第五高等女学校学徒との面接より。前掲『さわらびの記憶』75頁には別の元同校学徒の同様の体験が記されている。玉泉中学校学徒が属した農耕隊を指導した矢根軍市「二、日本転換の日の断面—ああ中島飛行機三鷹研究所の末路」鮫島健男編『思いをはるか太田に』紅雄会同人、1976年にも同様の記述が見られる。
- 103) 前掲『玉泉』42頁。
- 104) 前掲『学徒出陣の記録』192-194頁・2002年3月25日元東大文学部学徒との面接より。
- 105) 2002年12月13日元重機工業学校学徒との電話より。
- 106) 前掲『さわらびの記憶』46頁。
- 107) 2004年6月19日5名の元日大第二中学校学徒との面接より。